気象に合わせた肥培管理

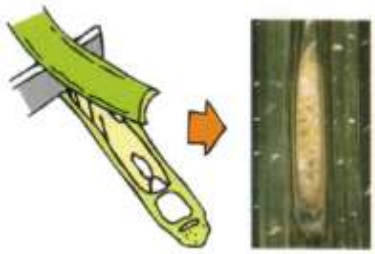
■穂肥時期・施用量の目安

・7 月は稲の穂作り（生殖成長）がはじまる月です。収量、品質を左右する重要な時期となり農家の腕の見せ所の時期でもあります。よく圃場を観察し、きめ細やかで適切な肥培管理を心掛けましょう。

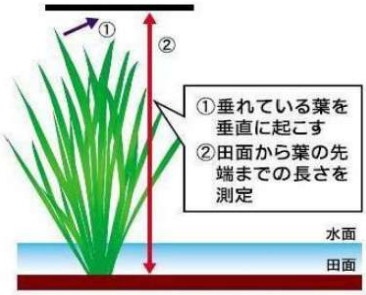
コシヒカリ幼穂形成期（幼穂長 2 ㎜）の稲の姿

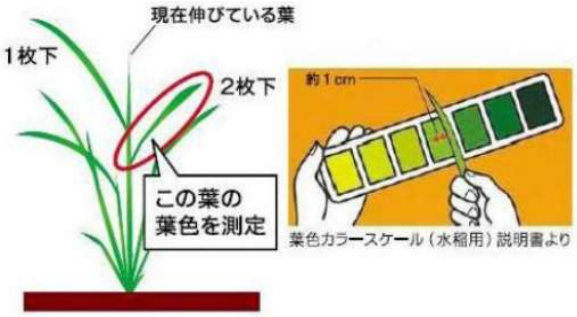
生 育	草 丈	葉 色	茎 数
適 正	82 ㎝未満	3.5	24 本/株程度
やや過剰	82 ㎝以上	やや濃い	25～27 本/株
過 剰	82 ㎝以上	濃い	28 本/株以上

幼穂長の確認方法　　草丈の確認方法　　葉色の確認方法



最長茎の地際をナイフで縦に切る





1)分施の場合　□こだわり追肥 570 施用量□

品 種	1 回目		2 回目	
	時 期	10 ㏊施用量	時 期	10 ㏊施用量
ハナエチゼン	幼穂長 1～2 ㎜（6 月 24 日頃）	適正 15 kg	1 回目の 10 日後（7 月 4 日頃）	適正 15 kg
		やや過剰 12 kg		やや過剰 12 kg
コシヒカリ	幼穂長 10 ㎜（7 月 16 日頃）	適正 12～15 kg	1 回目の 7 日後（7 月 23 日頃）	適正 12～15 kg
		やや過剰 10 kg		やや過剰 10 kg
		過剰 10 kg		過剰 10 kg
日 本 晴	幼穂長 1～2 ㎜（7 月 15 日頃）	適正 15 kg	1 回目の 10 日後（7 月 25 日頃）	適正 15 kg
		やや過剰 12 kg		やや過剰 12 kg

※特別栽培米に取組みの場合、「こだわり追肥 570」は使用できませんのでご注意下さい。

2)基肥一発肥料の場合

・猛暑により気温が高く推移すると、生育が旺盛になり夜間の呼吸量が増加し、それに伴い養分消費が多くなり葉色が低下します。

田植時の一発肥料を規定量施用していない場合や、高温により追肥成分が必要な時期を待たずに溶け出し葉色が低下している場合には、こだわり追肥 570 を7kg／10㏊程度、2回目の穂肥に相当する時期に追肥施用しましょう。

幼穂形成期前後の水管理

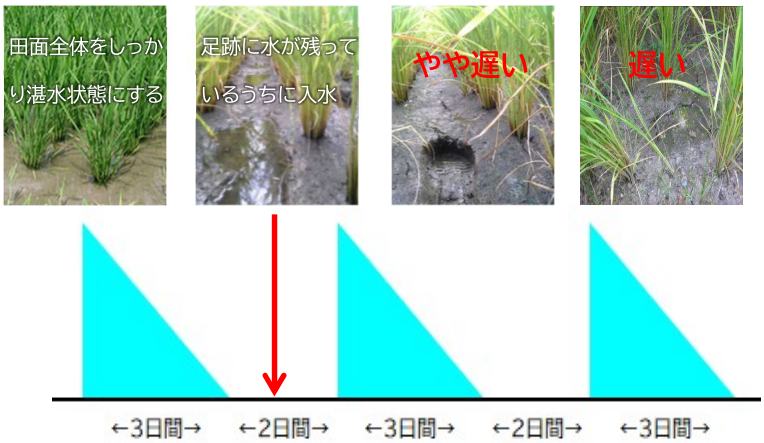
■水管理(間断通水)

・幼穂形成期から出穂・登熟期間は水を多く必要とします。稲はこれまで茎葉で蓄えてきた養分を水に溶かして穂に送り登熟します。出穂期は湛水管理し、その後は収穫直前まで間断通水を実施しましょう。

間断通水のイメージ

・出穂以降は根が増えないため、間断通水により土に湿り気と空気を供給し、今まで増えてきた根の数を減らさないようにしましょう。土壌表層にある上根(細かい根)は乾燥すると消失しやすいので、足跡に水が残っているうちに通水し、常に湿り気がある状態を維持しましょう。

・根腐れに注意し、水を溜めっぱなしにせず３日間湛水→1～2 日間落水を繰り返しましょう。



カメムシ(斑点米)防除対策

・カメムシ(斑点米)の被害は、ハナエチゼンを中心に格落ち要因になっていましたが、近年の温暖化による積雪量・積雪日数の減少により大型で生息期間の長いクモヘリカメムシなどが多発し、コシヒカリや日本晴でも大きな格落ち要因となっています。

■防除前の草刈りを実施しましょう。

・雑草の多い圃場や畦畔はカメムシの侵入を助長します。早期の一斉草刈り(出穂 10 日前迄に)でカメムシの住処や密度を減らしましょう。

県下一斉草刈りDAY・・・・・7 月 3 日・4 日

■基幹防除(2 回)を実施しましょう。

・斑点米予防にはラジヘリ防除などの一斉(面的)防除で生息数を減らすことが効果的です。

基幹防除(2 回)は必ず実施しましょう。

・ラジヘリ防除が出来ない圃場では、粉剤での2回防除または粒剤散布にて防除しましょう。

薬剤名	施用量	施用時期
エクシード粉剤 DL	3 kg	出穂期～傾穂期に 2 回以上　収穫 7 日前まで
アルバリン粉剤 DL	3 kg	
アルバリン粒剤	3 kg	出穂 7 日後～10 日後　収穫 7 日前まで